

「開拓定住」を問う場としての北海道

土田 拓 (COE研究員・RA)

北海道の平野部にみられる、碁盤状の地割の中に農家が点在する景観は、北海道開拓という営為の歴史性や時代性をよく表している。整然かつ計画性のある地割は、その形成を可能とした技術力・政治力の下に開発が進められたことを示すからである。北海道の場合、このような性格をもった地割は、明治中期以降の拓殖政策の中で主に形成されてきた。そのため地域的にみると、近世から開発の始まった北海道南部よりも、明治以降に開発の進んだ内陸部に多く見出され、それは現在も確認することができる。具体的な有様は航空写真を見ると一番よくわかるのだが、むらの中を歩いている時にもそれを実感することは可能だ。例えば区画の境にそって植えられたであろう防風林(写真1)を目にしたときなどがそうである。このような整然とした区画毎に農家は入植して、土地を拓いてきた。

もっとも、全ての農家が同じ状況にあったわけではない。私がここ二年ほど歩いている北海道紋別市周辺のむらの場合、平野に面した山裾の斜面にも農家がいくつか存在している。写真2の家はそのうちのひとつである。家の地盤を安定させるための石積み写真を写真中に確認できるが、そこで使われている石は、石積みを目として集められたものではなかった。

この農家は15町歩の土地の払い下げをうけて入植している。戦後入植であったため、平野部の立地のよいところに新規入植の可能な土地はなく、入植地は石の多い山の斜面となった。そこへ定住し、畑を拓こうとしたとき、根気よく石を除く作業が求められることになる。その石をただ取り除くのではなく、石積みという形で生活空間に利用したのであった。そのような、畑から取り除かれた石を利用した石積みが、この家の周りのいたる所にみられる。母屋と牛舎の間の小道や、水源である湧水に続く小道にまで石積みが設けられている。

山を拓き、除いた石を利用するという営みは、この地域に限ってみられるものではない。北海道以外の地域でもしばしば確認できる。その意味で写真に写る石積みは、人が特定の土地に定住しようとした時に、土地柄を同じくするところのあいだで、ある普遍性を持って共通に立ち現れてくる、開拓定住の基本的要素のひとつといえるだろう。

そうした開拓定住を形作る基本的要素のひとつひとつ

が、北海道の場合、目につきやすい形で景観に反映されている。そしてその成りたちを、開墾に携わった本人、もしくはそれを見て育った家族より教わることもできる。それらは、他の地域と違い開拓定住がなされてからそれほど時間がたっていないことに起因している。

近世以前からの歴史を有する北海道外のむらにおいて、その地の開拓定住のあり方を探ろうとしたときに手がかりとなるのが、景観に残された跡や史資料である。そこから得られる情報はどうしても、史資料の性格に応じて制約されざるを得ない。それに対して北海道のむらでは、開拓定住の跡とそれにかかわった人の体験を相補的に参照することが可能なのである。その利点を上手く生かせることができたならば、開拓定住という人の営為の骨格となる部分がみえてくるように思う。

写真1



防風林 (2004.7.31 北海道紋別市・筆者撮影)

写真2



石積み (2004.9.4 北海道紋別市・筆者撮影)